



ジュディス・L・ハーマン [著]

阿部大樹 [訳]

真実と修復

——暴力被害者にとっての謝罪・補償・再発防止策

みすず書房・四六判上製

2024年3月刊行

3,740円 (税込)

評者=亀岡智美(兵庫県こころのケアセンター)



トラウマ臨床に身を置く人ならば、Judith L Hermanの『心的外傷と回復』は必読の書であるが、本書は、その後の「長い沈黙のちに社会に送り出された渾身の一冊」である。『心的外傷と回復』では、トラウマからの回復のプロセスとして、①心身の安全、②想起と服喪追悼、③コミュニティとの再結合、の3段階が掲げられたが、本書では、さらにより大きな、コミュニティの「正義」とは何かについて、さまざまな観点から論じられている。

第一部では、専制による抑圧が被害者にどのような影響を及ぼすのか、そして、コミュニティに存在する大多数の傍観者の沈黙が、暴力を不可視化させ、被害者を孤立させる仕組みを説いている。この辺りは、中井久夫が「いじめの政治学」で記述している内容を彷彿とさせる。また、現在の刑事裁判制度は、性暴力犯罪に対して機能不全を起こしており、その中で被害者は辺縁に置かれ、個人的な不幸の中に取り残されてしまう様子が語られている。その一方で、被害者の所属を保ち、加害者も排除されるのではなく、やり直すための条件を教えられよう、フェアで相互的な「道徳のコミュニティ」とはどのようなものか、という問いが立てられている。

第二部では、被害者の声をもとに、被害者が真に求める正義とはどのようなものかが記述されている。まず、「道徳のコミュニティ」が被害者の声を聞き逃さず「不正を認知すること」、そして、被害者に落ち度がないことを確認することが不可欠である。ここでも著者は、直接間接的な傍観者の黙認や無関心が、加害者に加担することにつながると強調している。また、加害者の心からの謝罪とはどのようなものか、真のア

カウンタビリティとはどのようなものなのかが、修復的司法や宗教的視点から、その功罪を含めて考察されている。

第三部は、被害者が真に望む治癒とはどのような形なのか、補償や矯正、予防の在り方について、諸外国やさまざまなコミュニティの取り組みの紹介を通して吟味されている。現状では、どのプログラムやモデルも不確実な効果にとどまっているのだが、米国の大学で試みられている代替的解決法が、個人的には理想の形に近いように思えた。しかし、傍観者をいかにアカウンタブルにすべきか、支配と抑圧を、公衆衛生や市民安全に対する脅威としてとらえ、コミュニティがいかに連帯していくかということは、まさに、コミュニティに属する私たち一人ひとりが考え続けなければならない問題であると思う。

筆者は、2001年に斎藤学氏が企画された「ボストン・ケンブリッジの視察研修」に参加した時に、Herman先生の講義を受けたことがある。その時、身体外傷の後遺症でつらそうにしておられる姿を目の当たりにした身としては、その復活に甚く感激している。2023年の原著出版の翌年に、阿部大樹氏の素晴らしい日本語訳の本書に出会えたことも、望外の喜びである。ともあれ、本書がさまざまな領域でトラウマに関わっている人たちにとって、『心的外傷と回復』に続く、第2のバイブルになることを確信している。